晩夏

塚越淑行

CHOEISHA

晩夏

晩夏 3
誘う山 65
豆腐屋の女 119
あいつと俺 171
トワ 271
あとがき 349

一夏をすごすために初めて訪れた二人を見て、亜希は直感した、二人の間に流れ内向する何かがあると。……

母と子の強い絆と、反面にある生の儚さが胸を打つ表題作、他四作品の短編集。

生と死を見つめて

鳥影社

今朝、起きるとすぐに夏夫は風呂にはいって、うっすらと肌を赤く染めていた。その必要もないのに、丹念に汚れを落としたのだろう。わずかに笑みの浮かぶ顔を亜希にむけた。夏夫は亜希を責めてはいない。白い着物に白い帯をしめて、頭だけが青かった。

……

二十三歳という若さで、本当には知らないままに世の中を捨てて仏門にはいる息子が、口惜しい。汚れ矛盾だらけに見えたとしても、世の中は捨てたものではないと思える日がいつかくるに違いないのに、なぜ今、あえて決断をするのか、耕造には分らない。